

21世紀の大学と 進路選択

21世紀に高等教育就学年齢に達する子どもの親たちは、現在の大学教育にどのような効用を認めているのか。また、新しい世紀の教育トレンドについて、かれらはどのように捉えているのだろうか。さらに、子どもたちが

具体的な進路選択場面に直面したとき、かれらはどのような進路に子どもたちを方向づけていくのか。この章では、これらの問題について、アンケートの結果を眺めながら21世紀の教育像を描いてみることにする。

1. 大学進学 of 効用

Q15 あなたは、大学に進学することに、どのような利点があると思いますか。

「友人関係が広がる」「専門知識が深められる」ということに大学進学 of 利点があると評価している。教養・専門志向だけでなく、青春エンジョイ派もかなりの比率を占めている（とくに都市部）。概して、勉強が得意な子どもをもつ高学歴の親ほど、大学進学 of 効用を積極的に認めている（ただし、就職・資格取

得に有利という点を除く）。

大学に進学することには、さまざまな効用がある。少なくともそう信じられて、現在も多くの人が大学教育を受けている。親たちは、大学教育にどのような意義を認めて、子どもを進学させているのか。ここでは、大学進学 of 利点について13の選択肢を設け、回答を求めた（複数回答）。

表20 大学進学 of 効用(地域別)

	全体	地 域 別		
		岡山	秋田 岩手	東京
友人関係が広がる	76.9	78.9	69.3	84.3
専門知識を深められる	73.2	74.3	71.0	74.9
視野が広がる	61.9	61.0	60.1	65.2
教養が身につく	56.9	57.2	56.3	57.5
人間の幅が広がる	54.5	54.4	50.1	60.1
資格が取得できる	53.1	56.9	56.7	45.1
青春をエンジョイできる	50.2	56.9	39.5	56.7
就職に有利である	50.1	50.2	52.3	47.5
思考力・洞察力が深まる	39.8	38.2	40.3	41.0
趣味を見つけられる	20.2	22.0	16.4	23.0
社会常識が身につく	19.3	18.8	21.2	17.5
結婚に有利である	15.3	22.2	8.1	17.4
センスがよくなる	3.9	4.2	3.2	4.6

結果は、表20の通りである。利点として評価する比率が最も高いのは、「友人関係が広がる」(77%)で、これに「専門的知識が深められる」(73%)が続く。また、「視野が広がる」(62%)、「教養が身につく」(57%)、「人間の

幅が広がる」(55%)、「資格が取得できる」(53%)、「青春をエンジョイできる」(50%)、「就職に有利である」(50%)といった点についても、半数以上が大学進学 of 効用を認めている。友人関係が広がり専門的な知識が得られると

いう利点を認める一方で、教養主義的・人間形成的な機能も重視している。また、青春をエンジョイできるという反応がかなり多くみられ、単に大学が学問を学んだり人間的に成長したりするだけでなく、即時充足的な享楽志向を満たす場であるという位置づけがかなり一般的になっていることがわかる。消費社会の中で、大学生活を楽しむことに利点が見いだされている点は、きわめて今日的な特徴であるといつてよい。

大学進学 of 効用に対する評価は、回答者の居住地域によって若干異なってくる。とくに、秋田・岩手は、大学進学に効用を認める割合が全般的に低く、効用を認めるとしても「就職」とか「資格取得」に有利であるという点にとどまっている。依然として高等教育進学率が伸び悩んでいる県では、「仕事」と直接関連づけながら大学教育が捉えられていることがわかる。逆に、都市部の地域ほど、友人関係が広がって人間の幅も広がり青春をエンジョイできると考える割合が大きくなるようである。ここには、都市社会特有の消費主義的

な傾向が見受けられる。

子どもの成績(勉強の得意・不得意)によつても、大学教育 of 意義づけが異なっている(表21)。概して、勉強が得意な子どもの親ほど、「人間の幅が広がる」「教養が身につく」「視野が広がる」「思考力・洞察力が深まる」という利点を多く挙げている。大学教育によつて、一般的能力や教養を身につけ広い視野で物事を捉えることができるようになると評価しているのである。また、「青春をエンジョイできる」と回答する割合が大きいのもこの層である。これに対して、勉強が不得意な子どもの場合には、親は大学教育 of 意義をあまり評価せず、唯一就職する際の有利さという点で比較的多くの者が意義を認めているにすぎない。

大学進学 of 効用に対する見方は、回答者の学歴によつても大きく異なっている(表22、図15)。就職・結婚や資格取得 of 有利さを除くほとんどの項目で、教育年数の長い回答者ほど、大学進学 of 効用を積極的に意識していることがわかる。

表21 大学進学 of 効用(成績別)

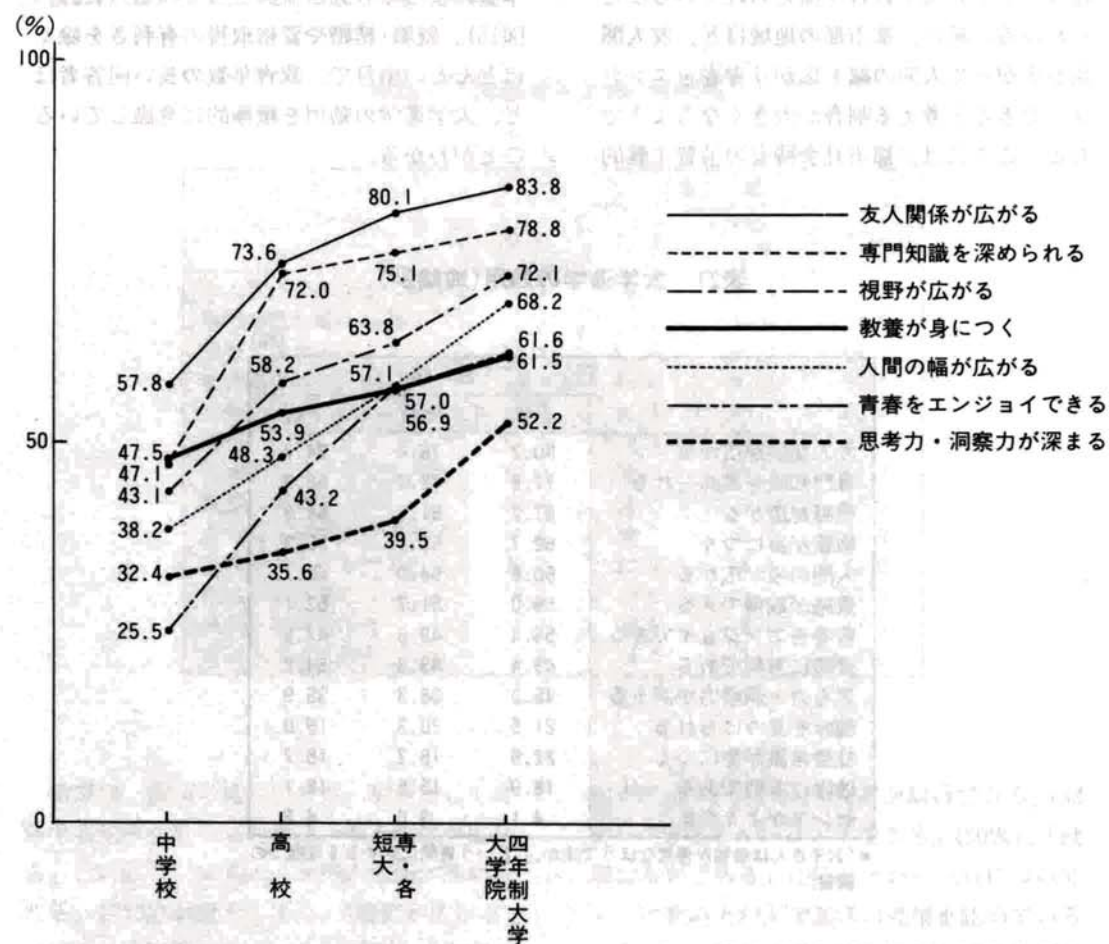
	成 績 別		
	上位	中位	下位
友人関係が広がる	80.2	76.6	74.7
専門知識を深められる	77.8	72.7	68.9
視野が広がる	67.2	61.9	54.9
教養が身につく	62.7	56.1	52.3
人間の幅が広がる	60.8	54.0	48.2
資格が取得できる	56.0	51.7	53.1
青春をエンジョイできる	55.4	49.3	47.5
就職に有利である	49.4	49.3	54.2
思考力・洞察力が深まる	45.3	38.3	36.9
趣味を見つけられる	21.5	20.3	19.0
社会常識が身につく	22.9	18.2	18.2
結婚に有利である	18.0	13.5	18.1
センスがよくなる	4.1	3.6	4.8

*「お子さんは勉強が得意なほうですか。」という質問に対する5段階での回答。

表22 大学進学の効果(回答者の学歴別)

	回答者の学歴別			
	中学校	高校	専・各短大	4年制大学大学院
友人関係が広がる	57.8	73.6	80.1	83.8
専門知識を深められる	47.1	72.0	75.1	78.8
視野が広がる	43.1	58.2	63.8	72.1
教養が身につく	47.5	53.9	56.9	61.5
人間の幅が広がる	38.2	48.3	57.1	68.2
資格が取得できる	51.0	51.4	56.0	52.6
青春をエンジョイできる	25.5	43.2	57.0	61.6
就職に有利である	51.0	52.5	50.2	44.6
思考力・洞察力が深まる	32.4	35.6	39.5	52.2
趣味を見つけられる	14.7	18.6	20.6	24.6
社会常識が身につく	19.6	18.2	19.6	20.9
結婚に有利である	20.6	12.2	16.6	20.1
センスがよくなる	3.9	2.4	4.3	7.2

図15 大学進学の効果(回答者の学歴別)



2. 21世紀の予測

Q16

あなたは、21世紀のはじめ頃、(あなたのお子さんが大学を受験する年齢になったとき)、大学進学や就職の状況は現在と比較して、どう変化していると思いますか。

高等教育該当年齢人口の減少にともなって、大学進学率自体はのびると予測される(とくに女子)。しかし、それに比例して大学に入りやすくなるとみられてはいない。しかも、すべての大学で入学がたやすくなるというのではなく、一流大学への入学はむしろむずかし

くなると予測されている。学歴格差がさらに広がるという認識も少なくなく、大学院を含めて教育による選抜のプロセスは依然として変わらないと考える者が多い。

子どもの出生数の減少にともなって、教育人口も大きく変貌を遂げようとしている。21世紀を迎えて、大学進学や就職の状況はどのように変化するのだろうか。ここでは、11の項目を設けてそれぞれについて回答を求めた(複数回答)。

表23 21世紀の予測(地域別)

	全体	地域別		
		岡山	秋田岩手	東京
全般的に大学への入学は…(やさしくなる)	42.9	40.3	41.8	46.6
一流大学への入学は…(やさしくなる)	12.8	12.4	13.2	12.8
大学に進学する人の割合は…(増える)	69.1	67.9	77.1	60.4
短大や4年制大学への進学を希望する女性の割合は…(増える)	80.6	82.0	83.7	76.2
大学院へ進学する人の割合は…(増える)	51.1	52.3	52.3	48.7
高卒で就職する人の割合は…(増える)	8.2	9.0	6.4	9.6
専門学校へ進学する人の割合は…(増える)	60.2	61.5	63.3	55.7
就職する際の一流大学卒とそれ以外の大学卒の格差は…(広がる)	35.8	37.9	38.0	31.5
就職してからの昇進や昇給で高卒と高卒の格差は…(広がる)	43.6	43.2	50.8	35.8
就職してからの昇進や昇給で一流大学卒とそれ以外の大学卒の格差は…(広がる)	36.1	37.2	39.8	30.7
大学進学は高校進学のようにあたりまえになる※	70.9	74.0	69.9	69.4

* 5段階評定尺度で、「とても」+「やや」と答えた人の合計。※は、「とてもそう思う」+「ややそう思う」と答えた人の合計。

表23が、その結果である。「短大や4年制大学への進学を希望する女性の割合」が増える」と回答した比率は、全体の81%に上っている。短大か4年制大学かの違いはおくとしても、女子の高等教育人口は今後ますます増加していくことが予想されている。また、大学に進学する人も増え、大学に進学することが高校に進学することのようにあたりまえの行動になっていくという回答がかなりの比率を占め

た。専門学校も同様に進学者を多く抱えると予想されている。これにともなって、全般的に大学への入学がやさしくなるという回答も4割をこえている。しかし、一流大学への入学がやさしくなるという見方はきわめて少なく、かなり大学間で機能の分担が進むという認識が一般的なようである。つまり、間口は広がるけれども、有名大学・難関大学の敷居の高さにはきほど大きな変化はみられない

だろう、と予測しているのである。また、見方によっては、大学進学がやさしくなるという回答は予想以上に少ないと評価することもできる。大学進学があたりまえになるなかで、それは無償で与えられるものではなく、やはり受験競争を潜り抜けていかなければ到達できないゴールであるという捉え方が依然として支配的なようである。また、大学院への進学者も増えるだろうという回答が半数をこえており、大学進学率の上昇によって、今度は大学院教育が従来の大学教育の選抜機能を果たすという認識があるようである。さらに、学歴社会については、さまざまなレベルで、学歴格差は縮まるとは予測されていないようである。むしろ広がるという回答が4割前後を占めている。つまり、教育人口を勘案すると大学進学がたやすくなるということになる

が、実際に子どもを持つ立場になると、それほど楽観的には捉えられていないのが実情である。これは〈幻想〉にすぎないと指摘することもできよう。しかし、その〈幻想〉が実際の教育熱となって現実の姿をみせることは十分に予想される。現実とはかかわりなく、主観的な見通しによって、教育をめぐる親たちの行動は作られていくのである。

なお、地域別にみると、学歴格差についての認識が大都市部で楽観的になっている点が目立つ以外はそれほど大きな違いはみられない。しかし、学歴による違いはかなり大きい(表24)。概して、高等教育の量的拡大を予想している割合は、高学歴者ほど大きくなっている。逆に、学歴格差が拡大すると予想しているのは、中学校・高等学校を最終学歴とする人たちの方である。

表24 21世紀の予測(回答者の学歴別)

	回答者の学歴別 (%)			
	中学校	高校	専・各短大	4年制大学大学院
短大や4年制大学への進学を希望する女性の割合は…(増える)	62.7	83.7	80.2	80.3
大学院へ進学する人の割合は…(増える)	32.3	52.0	48.3	58.5
高卒で就職する人の割合は…(増える)	18.6	6.7	9.2	7.8
専門学校へ進学する人の割合は…(増える)	47.0	61.5	61.6	59.7
就職する際の一流大学卒とそれ以外の大学卒の格差は…(広がる)	32.3	39.6	37.4	24.8
就職してから昇進や昇給で大卒と高卒の格差は…(広がる)	45.1	50.4	43.3	28.7
就職してから昇進や昇給で一流大学卒とそれ以外の大学卒の格差は…(広がる)	38.2	41.2	37.1	21.6
大学進学は高校進学のようにあたりまえになる※	57.8	75.5	70.6	65.3

※5段階評定尺度で、「とても」+「やや」と答えた人の合計。※は、「とてもそう思う」+「ややそう思う」と答えた人の合計。

3. 進路選択場面での対応

Q17

あなたのお子さんが進路をめぐる次のような選択をせまられたとします。あなたなら、どちらをすすめますか。あなたのお考えにどちらかといえば近いほうの番号に○をつけてください。

18歳人口が減少しても、基本的な進路選択行動は変わらないと予想される。選抜性と社会的威信の高い方向を選ばせる傾向がある。しかし、子どもが女子の場合には、推薦入学や大学院教育には理解を示すが、そうかといって刻苦勉励をさせようとはしない。また、

進路選択は家庭の経済的・文化的な環境に大きく左右される傾向がある。階層消費としての大学教育という性格は今後も続きそうである。

21世紀に入る頃、この調査の対象である小学生たちは、大学入学をはじめ重要な進路選択場面直面することになる。前項の状況予測をふまえながら、親たちはどのような進路を子どもに選ばせるのだろうか。ここでは、高校卒業時に出くわしがちな具体的な6つの場面を設定し、どのような選択を行なうかを探ってみた(表25)。

表25 進路選択場面での対応(性別)

	全体 (%)		
	全体	男子	女子
1「1 就職をすすめる」	56.2	58.6	53.9
「2 進学をすすめる」	41.9	39.4	44.5
2「1 専門学校をすすめる」	42.3	43.5	41.2
「2 大学をすすめる」	54.6	53.7	55.6
3「1 進学をすすめる」	44.1	39.6	48.8
「2 浪人をすすめる」	51.2	56.4	46.0
4「1 推薦をもらうようにする」	28.6	24.9	32.4
「2 他の大学に挑戦させる」	63.7	68.4	59.1
5「1 大学院進学をすすめる」	61.4	63.9	59.1
「2 就職をすすめる」	35.0	32.2	37.8
6「1 短大をすすめる」	26.4	—	26.4
「2 4年制大学をすすめる」	69.5	—	69.5

*各項目の状況設定は以下の通り。

- 1「お子さんの学力でも入れる大学があるのに、お子さんはどうしても就職したいといいます。その時あなたは……」
- 2「お子さんは専門学校に行きたいと思っていましたが、思いがけなく4年制大学に合格しました。その時あなたは……」
- 3「お子さんは滑り止めで受けた大学しか合格しませんでした。お子さんはどうも気が進みません。その時あなたは……」
- 4「あまり有名でない大学になれば、確実に推薦をもらえそうです。しかし、他の大学を受けるとその推薦は取り消されます。その時あなたは……」
- 5「大学卒業後、有名企業に就職が決まっていたのですが、お子さんは大学院に進学したいと言いました。その時あなたは……」
- 6「(女のお子さんをお持ちの方だけお答えください)お子さんは短大に合格が決まっていたが、思いがけなく4年制大学にも合格してしまいました。その時あなたは……」

まず、「お子さんの学力でも入れる大学があるのに、お子さんはどうしても就職したい」という場面では、「就職をすすめる」が「進学をすすめる」を14%も上回った（男子の方が若干高い）。何が何でも大学に行かせるというよりも子どもの意志を尊重する傾向が見受けられた。「お子さんは専門学校に行きたいと思っていましたが、思いがけなく4年制大学に合格した」という場面では、「大学をすすめる」が「専門学校をすすめる」よりも12%多く見られた。同じ高等教育機関であるなら、より社会的威信の高い4年制大学を選ばせる傾向は現在とさほど変わらないようである。「滑り止めで受けた大学しか合格しませんでした。お子さんは、どうも気が進みません」という場面では、「浪人をすすめる」が「進学をすすめる」を7%上回っている。この傾向は、男子の場合に強く見られ、「浪人をすすめる」割合が女子よりも1割近く高くなっている。さらに、「あまり有名でない大学になれば、確実に入れる推薦がもらえそうです。他の大学を受けるとその推薦は取り消されます」という状況になると、この〈上昇志向〉はもっと強まる。「他の大学に挑戦させる」という者が64%に上り、「推薦をもらうようにする」という回答を4割も上回ったのである。この傾向もまた男子に顕著であり、女子の場合は無理をさせずに推薦で入学させるという者がいくらか多くなる。「大学卒業後、有名企業に就職が決まっていたのですが、お子さんは大学院に進学したいと言いました」という場合にも、「大学院進学をすすめる」が6割強を占め、「就職をすすめる」を26%上回った。女子の場合にも、「大学院進学をすすめる」が59%とかなりの高率を占めており、刻苦勉強させるというよりも「大学院」という空間に身をおくことに理解を示す親が比較的多いことに気づく。女子については「短大よりも4年制大学を」という傾向が現れていることも事実である。「お子さんは短大に合格が決まっていたのですが、思いがけなく4年制大学にも合格してしまいました」という状況設定を行なった

ところ、「4年制大学をすすめる」がおよそ7割に達し、「短大をすすめる」よりも43%多くなった。

このように、18歳人口が大幅に減少しても、より社会的威信と選抜性が高い教育機関に進学させようとする傾向がなくなることとはなさそうである。したがって、教育人口の変動が直接に選抜過程の根本的変革にまで影響することはあまり期待できないのである。とくに、女子については、「受験競争」からは保護しながらも、より高い学歴（長い教育年数）を与えようという姿勢はむしろ強まっていくのではないかと予想される。

さらに、都市化の進んでいない地域の回答者ほど、よりむずかしい選択を行わせないようにする傾向がある（表26）。より長い年数を教育に費やすことをさげ、推薦で合格できればそれでよしとしそれ以上のレベルを求めないようにみえる。なお、岡山は、秋田・岩手と東京の真ん中にあるというよりもどちらかといえば東京に近い特徴をもっていることがわかる。

また、より微妙な進路選択場面になるほど、親の学歴によって選択が左右されることが浮き彫りになった（表27）。いずれの場合も、より高い野心を持たせるのは、高学歴の親の方である。これは、進路選択がある程度までは、家庭の文化的・経済的環境によって左右されている可能性を示唆している。図16は、それぞれの選択肢を選んだ人の税込年収（本人＋配偶者）の平均を示したものである。これによると、「浪人させること」「大学院に進学すること」「推薦よりも他の大学に挑戦させること」を選ぶ親たちの年収は、「浪人させないこと」「大卒で就職させること」「推薦をもらうようにすること」を選ぶ人たちよりも100万円前後高くなっていることがわかる。したがって、全般的にみて教育熱はさほど冷めないというだけではない。より細かく眺めると、そこには「階層消費」の実態が浮かび上がってくるのである。高等教育は、より家庭の経済的・文化的環境に左右されながら「消費」さ

れていくと考えられる。いずれにせよ、高等教育に対する需要を一枚岩的に把握することは、現在もそうであるようにかなり無理があ

るように思われるのであって、この点を見落とした「予測」はあまり意味をなさないとい

表26 進路選択場面での対応（地域別）

	地 域 別		
	岡山	秋田 岩手	東京
1 「1 就職をすすめる」	50.7	66.2	49.8
「2 進学をすすめる」	48.1	31.3	48.7
2 「1 専門学校をすすめる」	40.7	49.3	35.5
「2 大学をすすめる」	56.3	47.4	61.8
3 「1 進学をすすめる」	41.6	47.2	43.1
「2 浪人をすすめる」	53.9	47.4	53.2
4 「1 推薦をもらうようにする」	28.4	31.4	25.6
「2 他の大学に挑戦させる」	63.8	60.8	67.4
5 「1 大学院進学をすすめる」	65.9	52.7	67.7
「2 就職をすすめる」	31.6	42.7	29.0
6 「1 短大をすすめる」	21.8	32.5	23.7
「2 4年制大学をすすめる」	74.3	63.4	72.0

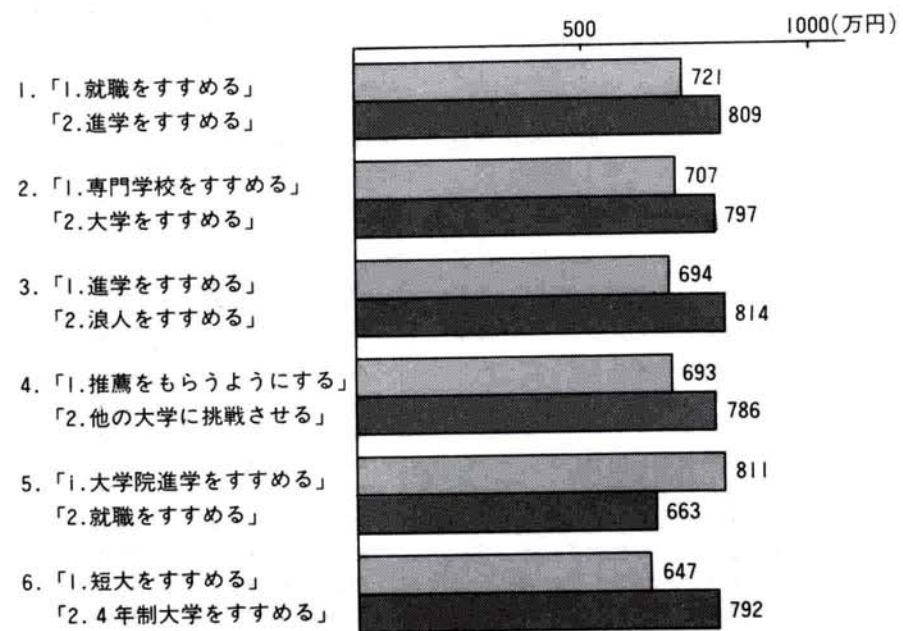
*各項目の状況設定は表25に同じ。

表27 進路選択場面での対応（回答者の学歴別）

	回 答 者 の 学 歴 別			
	中学校	高校	専・各 短大	4年制大学 大学院
1 「1 就職をすすめる」	74.5	62.8	54.3	40.0
「2 進学をすすめる」	20.6	35.8	43.9	59.1
2 「1 専門学校をすすめる」	64.7	48.0	41.5	26.7
「2 大学をすすめる」	29.4	49.5	55.9	70.8
3 「1 進学をすすめる」	52.9	46.5	45.3	35.3
「2 浪人をすすめる」	35.3	49.1	50.7	61.8
4 「1 推薦をもらうようにする」	43.1	33.5	28.0	16.4
「2 他の大学に挑戦させる」	43.1	60.4	63.9	77.0
5 「1 大学院進学をすすめる」	45.1	54.8	64.0	78.4
「2 就職をすすめる」	46.1	42.4	33.5	18.5
6 「1 短大をすすめる」	51.0	33.9	23.5	7.6
「2 4年制大学をすすめる」	37.3	63.7	72.1	88.4

*各項目の状況設定は表25に同じ。

図16 進路選択場面での対応と平均年収



* 各項目の状況設定は表25に同じ。